

氏との面識も含めて、深く長く、そのことがただでさえ大きかった先生のものの方を一層拡大させたのではなかったろうか。先生はこの小川家に家庭的にも温かく迎えられ、これらの兄弟の生母小雪夫人には特に目をかけられ、生前しばしば眩暈に悩まされた小雪夫人が後に脳を鼎三さんに調べて貰いたいと遺言され、小川先生が京都に赴いてその脳を脳研に持ち帰られ、連続切片を作って精査されたのも、いかにその絆の太かったかを偲ばせる一挿話である。

小川先生の研究は脳から心臓へと移り、さらに一転して医史学へと拡がり、そのいづれにおいても独自の境地を開かれ、特に医史学の領域では中興の祖と仰がれていることは欣快にたえない。他方、一枚の脳の標本から百以上の研究課題を見付け出すと言われた先生が、これさえあれば研究費がなくても十五年や二十年は研究を続けて見せると豪語され、なによりも大事にしておられた脳研の宝、すなわち多数の脳の連続標本は、分子生物学の時代には無用の長物として、今日東大資料館の中で埃を被り、長い眠りについている。ブラウン管に写る虚像を頼りに殆どのが運ばれてゆく世の中では、標本にとっては研究室に置かれるよりはむしろその方が安全であるとも考えられようが、実物の飽くことなき観察から全てが生ずると論された小川先生の薫陶を受けた身には、長い伝統の裁ち切れたことに複雑な思いがこもるのである。

解剖学と鯨学と医史学と

浅見 一羊

小川鼎三先生が畑違いにも見える三種の学問領域で活躍されたのにはどんな必然性があったか。幸い一般向の著作も数多く遺された。とりわけ本の序文または後書きに執筆の心境を率直に述べておられる。

解剖学の関係では「脳の解剖学」という名著がある。刊行は今から五十年前の一九五一年秋、赤核の研究が学士院賞を受けたのも同年春のことであった。序文に、戦時中東大医学部の上級生に講義した内容がこの本の根幹をなすとあり、軍医として戦地へ赴く若者への想いが窺われる。本文は講義十五回の体裁をなす。第七講に「赤核に関する実験」のあらましが説明されている。研究がほぼ成就した当時の鋭気が漲るこの章を、私は幾度も読み直す。自分の眼でも確かめたくて、東大資料館に脳の連続標本を覗に行ったが、オットセイやネコの赤核はオイソレと見出せるものでなかった。第十四講「鯨の脳について」では、手足が貧弱な代わりに巨大な尻尾をもつ鯨が、体つきの点でヒトとは両極端の位置にあり、その運動は主に錐体外路性であるなど、「鯨山からヒト山を覗る」という譬えの実例である。

『鯨の話』は鯨学の金字塔と呼ぶ人もいる。脳研究の必要でイルカの材料を求めたところ、近海産歯鯨の分類学が不備

な事実面に直面し、余暇を用いてこの問題に関わる。先ず三陸沖のイルカ約十種についての成績を発表したが、マイルカの学名に混乱があり、シーボルトの『日本動物誌』に録されたイルカの種を同定する念願もあって、一九三四〜三五年の休暇には全国津々浦々を訪ね本格的な探究を展開する。本邦産齒鯨として十九属二十七種を確認、うち十二種が初めての実証であった。戦後に捕鯨事業が復活、教室と脳研のスタッフが次々南氷洋捕鯨の母船に乗り込み鯨体の諸構造を調査した。第一回目(一九四七)に細川・山田を伴い小川先生自ら乗組む意図は、肋膜炎の為に断念された。「鯨類の解剖学において経験したことども」と題し日本解剖学会の総会(一九五七)で特別講演をされた際、座長の西成甫先生が「比較解剖学に二つの流儀、系統発生を軸にするのと、特定の類を拠点に人の解剖学を見直すのがあり、小川教授は後者の典型」と紹介された。

歴史学への関心を育まれるについては郷里の精神風土を見逃せない。東北大医学部で富士川游氏の特別講義「医学の歴史」(一九三二)が行われた機会に「東北大医史学同好会」が結成され小川先生も参加された。日独文化協会が「シーボルト研究」の刊行(一九三八)を企画し、先生は「シーボルトと日本の鯨」を執筆、史学に関する最初の論文となる。続いて帝国学士院が皇紀二六〇〇年(一九四〇)を記念して企画した『明治前日本医学史』の第一巻「明治前解剖学史」を担当、出版(一九五五)はもち越されたが、古今の原漢文史料を読破し

ての力作であった。医史学は当時あくまでも余技としておられた。東大を退官し(一九六二)順天堂に医史学研究室を開かれて以来、解剖学会には姿を見せず、東京国際解剖学会(一九七五)の際「The Beginning of Anatomy in Japan」と題し特別講演をされたのが唯一の例外であった。「医学の歴史」(一九六四)が毎日出版文化賞を受け、お仕事は愈々本格的段階に入った。姉妹篇『解体新書——蘭学を起こした人々』は内容が専門分野だけに、個々の事績を全体の発展に結びつけ、その文化的意義を考究されている。歴史的人物の人となりに対する洞察も鋭い。私は頂いたこの本の扉に「昭和四三年六月二八日。大内総長談話のあと机上にこの冊子を得て」と書いた。医学部に端を発した東大紛争が酣の時、全学に向けた異例の総長談話を聴いて戻った研究室の机にこの本は置かれてあった。前年に『東大医学部百年史』の編集委員長として刊行された小川先生が紛争の成行きをどれ程案じておられるか、申し訳なきと励ましとが交々身に滲みだした。先生が東大を退官されて十年の後、図らずも私は先生のおられる順天堂に勤める身となり、その病院で逝去されるまで傍近く過すことができた。晩年の先生は『順天堂史』の執筆に心血を注がれた。没後に編集された『小鼎追悼録』を繙けば「桃李不言、下自成蹊」の感があり、小川先生を取り巻く方々と出会えたこともわが生涯の幸せであったと思う。